

皆様はじめまして、脚本家・小説家の吉田恵里香と申します。昭和 62 年生まれの 37 歳で、4 歳半の息子がおります。今日はよろしくお願い致します。私の経歴などをご紹介いたしたいんですけど、この場にお呼びいただいた一番大きな理由は、昨年度の朝ドラ「虎に翼」とであると思っております。さらに言うと、「虎に翼」の第 1 話が、憲法第 14 条から始まるという事もあって、この場にご招待いただいたのかなと思っております。そのため最初に、改めて第 14 条とはという所からお話していけたらと思っています。憲法第 14 条とは、「すべての国民は、法の下に平等であり、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において差別されない。」この文章から、朝ドラは始まっています。全ての作品がそうなんですけれども、第 1 話の最初の頭というのは、私にとって少なくとも、この作品ってこういうものですよという自己紹介の為に、記述しています。ですので、この憲法第 14 条から始まるという事は、この作品は、その 14 条がテーマというか、中心になる部分があるという事を示したかったですし、この作品を通して 14 条の持つメッセージや様々な思い、なぜこれができたのかというものを感じていただきながらドラマを見て欲しかったなというのが狙いで、この 14 条から始めました。もっとさらに言うと、なぜこの 14 条から始めたのかという話をするには、朝ドラでなぜこの題材を扱ったのかという話をさせて頂きたいと思います。すごく遡るのですが、最初にご紹介にもあった「恋せぬふたり」というドラマは、アロマンテック・アセクシャルという他者に恋愛感情を抱かなかったり、他者に性的興味を抱かない方を主人公にしたドラマなんですけれども、それを一緒に制作したプロデューサーの尾崎さんという方に私はずっと朝ドラを書いたり、朝ドラになるのが目標なんですっていうのを初めて会った時からずっと話していました。「恋せぬふたり」の終了後に尾崎さんからお電話をいただきまして、朝ドラの脚本の候補に私の名前を挙げていいかというお話をいただきました。びっくりだなと思ったのが一番最初の感想なんですけれども、もう一つは、その時は向田邦子賞をいただく前だったので、特にその経歴もない自分に、なぜ尾崎さんが、朝ドラのスク립トの機会をくれたんだろうという事をすごく考えまして、自分としてはすごく朝ドラが好きなので、ザ朝ドラみたいなものをやろうかどうかっていうのをすごく悩んだんですけども、その時の私にオファーをいただいて、かつ、作品と一緒に作り上げた尾崎さんが、なぜ私にオファーをくれたのかという事をすごく考えまして、朝ドラでやるからにはこんな朝ドラがあってもいいよねというか、何かちょっと今までの朝ドラの味わいの違いと言いますか、何か違うものができたらいいよねという話から始めた作品です。その中で様々な朝ドラの主人公像が今まで描かれてる中で、もちろん気の強い主人公、自我が強い主人公、母性に溢れていない主人公もたくさんいるんですが、朝ドラを見てない方々の朝ドラの主人公像として、太陽のように明るく、自己犠牲に溢れ、母性にあふれ、優しさにあふれ、何かの時には厳しい、そんないわゆるしっかりとした大人の女性になっていく主人公と思われがちなんです。朝ドラをずっと見てくださっている方からすると、そんなことない、いろいろな主人公が描かれてるぞと思う方もいるんですけども、私はこの普段朝ドラを見てない

方々に朝ドラを愛してもらえないかなという思いと、自分のドラマをきっかけにずっと朝ドラを見て貰えたらいいなという気持ちで、これまでのいわゆる朝ドラの主人公像とは違う主人公を描きたいなという気持ちが強くありました。自分の中では最初は、ケアと搾取についてのテーマの朝ドラを作りたいと、ケア労働についての朝ドラの制作を思ったんですけども、自分が初めて朝ドラを書くという事で、原作というかモデルになる方いる場合と、全くのオリジナルバージョンで、作品を同時並行で作っていったんですけども、その中で、モデルを誰にするかという時にすごく強い女性を描きたいなという気持ちが強くありまして、その中で、NHK のプロデューサーが探してきてくださったのが、三淵嘉子先生です。三淵嘉子さんは、ご存知の方が多いと思うんですけども、日本で初めて、弁護士資格を、今の司法試験に合格した女性の 1 人でした。日本初の女性弁護士であり、厳密に言うと所説あるんですけど、裁判官になった時も女性としてはほぼ初めての方で、その後、最高裁判所長に選ばれたのも女性のなかでは初めての女性です。三淵さんはすごく強い女性で、明るくて、もう本当に誰からも愛される人、その全ての愛情に溢れてる方なんですけれども、自分の中では、偉人伝は書きたくないなという気持ちがあり、その中で何かすごく素晴らしい女性だから何かを成し遂げたという話にはしたくないなという気持ちで、三淵さんをモデルにするかどうかをすごく悩んでいたんですけども、その際に、メインスタッフの方々に、吉田さんが関わってらっしゃるケアとか搾取については、やっぱりこの法曹界っていうのはすごく相性がいいじゃないですかという話になり、確かにそうだなと思い、そして、朝ドラというのは、モデルになる方いるんですけども、皆さんご存知の通り、その全てをなぞる訳ではないんですね。ですから、やっぱ名前も違うし、様々な設定が違う事が多いんですけども、その中で、じゃあその偉人伝にならないで、今の人の心に刺さるものは何かというものを一緒に目指していきましょとなり、そこから三淵嘉子先生をモデルにした朝ドラの原案となるプロット作りが始まりました。その中で、今はウィキペディアにも三淵さんのページがあるんですけども、当時は本当に資料がなくて、国会図書館などで、インタビュー記事を探したりしている中で、三淵さんが敗戦後に公布された日本国憲法のこの平等に関する部分にすごく新しい世界が開ける、すごく希望を感じたという事を、あらゆる記録に残ってるインタビュー記事の中でも何度も繰り返されていて、これがとてもその憲法は、この物語を作る上で大事な物だろうと思い、改めてそこで、そこから私も勉強をし直したところではあります。その中で、勉強していく中で、この 14 条というものをすごく支え、もしくは盾にして戦っていらっしゃる方とか、自分の権利や人権を守るために戦っていらっしゃる方が、今なお多くいるんだなという事に調べれば調べると気づかされました。ですので、これはもう一番最初に、見せるというか、物語として 14 条を示すしかないなと思ったのがそのあたりから決めていた事です。ただ、その 14 条という物自体は、この作品において、内なる核というか、内なるシーンの部分であるつもりで始めたんですけども、何の話をしていても、最終的にこの 14 条の、差別されないという部分に戻ってしまい、ちょっとドラマを見てない方からするとわからないか

かもしれませんが、登場人物の山田よねというキャラクターの法律事務所の壁にも 14 条を書き、何度も何度も作中でも 14 条を映す流れとなりました。それは作っていく中で見たもので、内なるメッセージではなく、大々的に表に出していかななくてはいけないメッセージだと感じ、14 条を何度も何度も作品の中でも紹介したという流れがあります。私自身はすごく朝ドラが好きなんですけど、毎日の希望というか、朝見れなくてもその日の夜を締めくくったり、主人公を登場人物たちと寄り添うこの半年間というのは、自分の中で一つの柱になってるものでしたので、寅ちゃんが他の登場人物がどれだけ視聴者の方の共感になれるかということを常に考えて制作しました。その中で、主人公、寅ちゃんの性格について考える時、先ほどの見てない方が考える朝ドラヒロイン像とは違うものを描きたいという気持ちがあったりもしていました。なので寅ちゃんは、すぐ調子に乗るし、失敗するし、ミスするし、怒るし、利己的な部分もあるし、自己中心的な部分も多いです。完璧な登場人物だったなんて言われたら、すごく完璧な登場人物だったよねって言うてくださる方は少ないんじゃないかなと思っています。そういう登場人物だからこそ寄り添うこともあり、そういう登場人物だから正しくなくても法のことを語っていいし、平等について語っていいし、人間について語っていいし、きれいごとと言われるようなより良い社会について述べていいんだと、そういうメッセージを込めて、寅ちゃんを描こうとしました。そのため、寅ちゃんの普通の朝ドラ主人公像とは違う性格になっています。そのため、この主人公は好かないとか、この主人公は嫌だっていうこともいただきましたが、それはそれでいいと思っていて、全ての人に好かれようとする作品になると、そこで取りこぼされるものがいっぱいあるかなと思っています。どちらかと言うと普段取りこぼされる側に焦点を当てたり、取りこぼされる方がちゃんというよ、存在するよっていうことに意味があると思って作った作品でもあります。その中で、自分の中では予想外の反響がありました。それは、感想をいただく時って、作品によっては、何々俳優さんが好きとか、このエンディングが良かったとか、そういう感想が多い中で、特に多かったのは、自分ごとというか、感想の後に実は私はこうでとか、私も実はまるまるですというように自分語りをしてくださる方がとても多かったのがすごく予想外で嬉しい意外な出来事でした。自分のことを初対面の人に話して私自身もなかなかハードルが高いし、本当は知りたいけど聞けないし、どう思っているのか、何か辛いのかっていうこと、知らない人に喋ることって難しいと思うんですけど、すごくありがたかったのが感想の中で、例えば、育児ノイローゼになってしまって、3 ヶ月間子供を母親に預けましたとか、両親が外国出身で差別を受けましたとか、友達が小学生の時ハンディキャップのあるクラスメイトがいたときに冷たくしてしまったことを今でも悔やんでいますとか、様々な感想をいただいて、作品が現実とすごく繋がっている感じがして、すごく嬉しかったんですね。それに、作品を愛してくださっている方々が、個人的に皆さんの作品感想会をやったりイベントを開いてくださっていることも聞いて、フィクションというかエンターテインメントと社会が、すごくグラデーションになっていて、そういう作品を作れたことはすごく嬉しいかなと思っています。私自身はエンター

テイメントにすごくパワーがあると 思っています。速攻性がなかったりするんですけど、社会通念とか、普通になっているおかしいこととか偏見とかに疑問を呈したり、これはおかしいんじゃないかという私の作品っていう、はて？っていう気持ちは、訴えることができるのはエンターテイメントだけなんじゃないかなと思っていて、速攻性なくても少しずつ少しずつ訴えて、グラデーションで社会の考え方とか偏見とかに気づきとかが変わっていく力があるとずっと信じて、自分が制作を続けてきたので、虎に翼においてはすごく実感することができましたし、憲法第 14 条をだしてくれたこと改めて考えさせられたという声をいただいて、すごくやって良かったなという気持ちです。自分の中ではこの憲法第 14 条から始まるって結構賭けで、朝ドラの視聴経験がある方はご存知かもしれないですけど、最初の 0.2 話というか 1 話、2 話まで見ずに視聴をやめてしまう方がすごく多い中で、ここから急に憲法の条文から始まるっていうことをやることにすごくドキドキして、シナリオ打ちの時もしかしたらみんなからダメって言われるかなと思いながら出したんですけど、誰も反対とか異議を唱える人がいなくて、むしろやっていきましょうもっと色んなところで、文字で、テロップで出せるドラマってなかなかなくて、それこそ朝ドラだからやれることなんじゃないかという話をいただいて、これがこう回り回って色んな人の生活や色んな人の支えや、それこそコミュニティを作ったりすることができたのが嬉しいなと思っています。ちょっと話が前後してしまうんですけども、私がエンターテイメントにそういう社会的な問題を変えたり、何かを疑義を唱える力があると申し上げたのは、当事者の方が何か問題を訴える声って、少しきつい言葉になってしまうかもしれないですけど、関心がある方しか届かないことが残念ながら非常に多いです。それは私も含めてですが、様々なことを聞いていく中で何を関心を持つ、何を興味を持つ、何にアンテナを張るかっていうのは本当に人によって変わっていて、経済状況とか日々の生活の中でそのアンテナの数が 1 本なのか 100 本なのか、それは本当に人によって違うことだと思っていて、そのアンテナの数を責めることはやっぱりできないなと思っています。でもその中でやっぱりその当事者の方だけが何かを訴えるというのは限界があると思っていて、いいこととしてやるとか、何かそういうことではなくて、当たり前がいい社会になった方がいいじゃないかっていう気持ちでやってるんですけども、当事者でない自分でもできることがあって、それはエンターテイメントというか、小説なり脚本なりでやっていくことができるのではないかと、この 10 年は思っていて、それで活動を続けています。その中で、私が最近ずっと思っていることがあって、虎に翼でも、法とはなにかという問いかけをずっとするんですね。最初、寅ちゃんは毛布とか傘とか盾の様なもの、よねは武器だという言い方をします。寅ちゃんがどんどん成長していく中で、水源のようなものなんじゃないか、いやその水源を渡る船なんじゃないかというような問いかけをしています。私が最近、インタビューでも答えたことがあるんですけども、この虎に翼を書いて思ったのは、何かその法という物自体が、私たちの身の回りにある空気とか酸素というか、そういうものなんじゃないかなとすごく考えていて、普段は当たり前の様にあって、それを当たり前の様に過ごしてい



るけど、それを侵されると生き辛さ、苦しさを感じたり辛くなっていく。だから守られなきゃいけないのかなと思っていて、それぐらい自分の生活というか、人としてあるべき姿に密接しているのだなと思っています。私もよく、ドラマを書く際に生き辛さとか辛さみたいな言葉を使うんですけど、自分の中ではその生き辛さとか辛さは多くの人々の人権が多くの無自覚な人たちによって踏みつけられているせいで息苦しくなり生まれるものなのではないかなと思っています。なので、その生き辛さを解消する方法、空気を綺麗にするためにどうしたらいいかという観点で、法とか、倫理観とか、道徳心とか、様々なものが正しく清らかにあるべきだなと思っていて、そのためには様々な問い掛けをしているというのが私の中ではあります。最近すごく思っていて、これは後で皆さんにも聞いてみたいんですけど、自分が 100%正しいと思ってるわけではないですけど、誰かの権利を阻害するもので、かつ自分には環境が何も変わらないことってあると思うんです。それが様々な道徳心とか、社会通念とか、「今までこうだったから」という理由で、なかなかその権利が勝ち取れなかったり、成し遂げられないことがすごく多いなとずっと思ってます。私自身は虎に翼では、結構ストレートに書く機会をいただいて、それに対しては後悔もないし、このスタンスがすごく好きなんですけど、それってどれだけの人の考え方とか、無意識の差別的なこととかの偏見を良い方向に持って行けたのかなと考えてる時に、より北風と太陽ではないんですが、より心を閉ざさせてしまってる部分もあるのかなと最近思っていて、この自分の中でどういうスタンスで、これからのエンターテインメントで様々な生き辛さとか社会状況とか、偏見とか差別に向き合っていくのかなって、ちょっと今、どうしようかなと思ってる部分もあって、それは後でもし良ければご意見を伺いたいところではあるんですけど、すごく悩んでる所ではあります。すごく難しくて私の個々の考えで言えば、「いやいや、あなた、皆が少しでも生きやすく、様々な権利が保障されることに、なんでそんなに文句を言うんですか」「なんで邪魔しようとするんですか？皆が勝ち得る権利なんですよ」っていう気持ちで言いたくなることが本当に何度も何度もあるんですけども、でもそこにある壁ってなんだろうと考えた時に、一番の大きい壁って、そういうことに真っ向から、理屈じゃない、自分が守られてるものが壊れるとか、自分が信じてるものが壊れるとか、差別的な発言ばかりしている人ではなくて、中立層というか、中立でいたいという気持ちから生まれる、それを責めるわけでは決してないんですけども、無意識に差別側に片足を突っ込んでしまってる人がすごく大きい力を持ってるのかなと思っています。もちろん差別的なことを言ったり、偏見を持つことも絶対ダメなんですけども、こういう議論をした時に、「まあ、分かるんだけど」「だけど」「でも」「難しい問題だよね」とか「でもこっちが何とかだよね」って結構終わってしまうことがすごく多くて、この中立でいたい気持ちみたいなことがすごく無意識に働いていて、色んなことの壁になっているなということを最近すごく感じます。例えば、様々な意見があるのは分かりつつ、あえて発言させて頂くんですけども、選択的夫婦別姓問題に関してもそうですね。私が最近すごく、反対をどうして反対するのかっていうのがすごく知りたくて、色んなことを調べて

いくと【今のこの法の形自体を一切変えたくない】っていう気持ちがすごくあることや自分自身ではなくて、「この日本が」「この国が」のように、ちょっと主語が大きなところで戦っている人たちがとても多いようです。でも選択式夫婦別姓導入を求める方は当事者だったり、当事者でなくても「導入を求める人たち」もしくは「人権侵害が許せない自分自身」が主語であることが多いと思っています。その主語の大きさの違いみたいなことをすごく感じていて、視点が全然違う中で話しても全く響き合わないし、妥協することでもないんですけど、話し合いの糸口が見当たらないなあとすごく悩んでいて、自分は、この中立層というか、その間の層に響いたり、意見を求めるためにエンターテインメントをやっているんですけど、なんかどっちがいいんでしょうね。すごく最近それを悩んでいます。差別したり偏見を持つ人に、丁寧に優しく指導しなきゃいけないのかという気持ちもあるんですけど、北風と太陽という感じでいくと、少しでも良くするためになにができるのかっていう時に、エンターテインメントでストレートにやるのがいいのか、優しく包んでやるのがいいのかというのは、日々すごく私が今悩んでいるところです。結果的により良い社会になればいいのですが……これって答えがない。ないんですけど、私自身は虎に翼みたいにしてストレートに問題を提起する方が好きで、なるべく多くの問題提起を作品の中でしていくのが好きなんです。なので自分自身のスタンスとしてはきっと変わらないと思うんですけども、エンターテインメントとか脚本家としての私はそうだとすると、じゃあプライベートの私はどうなんだ、と自分の中で最近考えることがすごくあります。普段生活していると皆さんもそうなんですけど、決して誰かと喧嘩したいわけでも、誰かと争いたいわけでも、誰かを正したいわけでもないと思うんです。より良いもののためになにかを主張したいとか、より良い社会にしたいっていう気持ちがある時に、どうしたらいいのかなということすごく最近考えています。例えば、私もつい使いたくなっちゃうんですけど、「難しい問題だよね、終わり」みたいな。何かを訴えてる人に対して、「いやあ、それはちょっとあれだね、まあ、どっちの意見も分かるけどね、うん、終わり」みたいなことがすごく多くなってしまうんですけども、そういう時ってやっぱりその人は意図してなくても、加害者と言うと良くないんですけど、今ある当たり前の声を上げる方に寄り添ってないというか、今あるものを守る側に重点が片寄ってるなって思っていて、それは本意ではないはずだなと思っていて、それは先ほどの中立の話に戻るんですけども、私自身が最近気を付けているのは、中立の立場に立つんじゃないくて、何かを取り持つ時に、自分には興味がないこととか、自分には関係ないこと、別に私は何もそれにたいして関係ないし、興味がない、むしろどっちでもいいということに関しても、なるべく1回は声を上げている側の人に寄り添うというか、同意するとは違うんです。「いや、難しい問題だね」は声を上げている人の側に立ってないというか、まずは「そうなんだね」って話を聞こうということすごく心がけています。その中で自分の中の、虎に翼を見てない人にはさっぱりだと思ってしまうんですけど、自分の頭の中に桂場が出てきて、「続けて」って言葉をすごく言うんです。桂場自身は色んな短所のある人間なんですけど、自分が書いた作品の中に答えがあるじゃんっ

て最近思っちゃったんですけど、とにかく話を聞くし、否定しないし、口を挟ませないで、最後まで続けてもらって話を聞くっていうことが、どっちの立場においてもすごい大事なことになるんじゃないかなと思っています。普通の対人関係でも分かるじゃないですか。自分の言葉を遮って理解してくれない人はすごく嫌じゃないですか。それと同じで何かの意見をディスカッションする中で、自分の考えと違ったり、それはちょっと差別的、時代遅れじゃないっていうことでも、最後まで1回聞くと、その人の何が恐怖で、その何が本当の主張なのかっていうのがすごく分かってくるかなと思っていて、すごく時間がかかるし、面倒くさいし、相手がその場を逃げちゃうこともめちゃくちゃあるんですけど、自分が最近その心の中にいる寅ちゃんと桂場を両立させて「続けて」という言葉で最後まで聞く。自分の意見を言うのは最後にしようっていうのはすごく、中立というか、非当事者の自分が誰かの意見を聞く時にはすごくそれを心がけています。それだけでも、本当の意義での中立になることができるのではないかなと思っていて、どうしても自分の意見言いたくなっちゃうし、話を終わらせたくなくなっちゃうとか、「あ、分かってる、分かってる、私そんなに差別的な人じゃないから」「あ、分かってる、分かってる、私はもう、別に差別をするつもりもないし、なんかそういう人たちが嫌いだから」っていう気持ちから遮っちゃったり、でも自分の意見がどちらかに寄ることがちょっと政治的な感じがしてしまったりとか、思想が強いみたいな言い方をされてしまうことを恐れて、つい中立のことを言ってしまうがちだなと思うんですけども、無理に合い槌を打たなくてもいいのではないかなと思っていて、相手も「そうなんだ」とか「続けて」とかそういうことで、まず相手のことを知る事から始めることができるのかなあと最近は私自身考えていて、でもこの気持ちになったのも、虎に翼が私の中で凄く大きくて、それまでは、正しいことは正しいんだから、間違ってることを言っている人の意見を聞く必要はそこまでないんじゃないかとか、自分の意見を積極的に主張し通すことの方が社会を変えたりとかそういうことができるんじゃないかっていう気持ちがあったんですけども、虎に翼を書く上で、法や様々な法曹関係の方々もしくは考証の方々の話を聞く上で、様々な戦い方があって、様々なやり方があるということを感じて、自分は作家としての戦い方と個人の吉田恵里香としての戦い方をすごく悩んでいて、今は自分の心の中に桂場を置くということを答えにしています。言葉選びがすごく難しいですけど、最近世の中がちょっと怖い方向に行っているなということがすごく多い気がしていて、子供がいるいないは関係ないんですけど、特に自分の子供もいるので、戦争とか社会が変わっていく足音を感じていて、恐怖を覚えています。虎に翼をやった時もすごく心がけたんですけど、戦争というものもここからスタートで戦争開始ですってなるわけではなく、皆の社会とか皆の生活の中にじわじわと戦争の火種があって、戦争が起こると思っていて、なので私自身は作品の中でもかなり直接的に戦争反対とか、戦争はダメだという事をやってきました。そういう意味で、作品としての、手ざわりはすごくちょっと無骨な部分もあったと思うんですけども、綺麗なものとか作品の美しさみたいことにオブラートに包める時代がもう終わってしまっているんじゃないかなという

気持ちがあって、私は虎に翼においては、ある意味無骨というか、ある意味整っていないとか、でもそういう直接的なメッセージを掲げていこうと思って作った作品です。でも自分のなかで、もちろん、全てが作品になるわけじゃないので、先ほど言った通りエンターテイメントで速攻性はないのであれなんですけれども、このゆっくりペースと社会が変わっていくペースのスピードの違いに最近ちょっと、どうしようという気持ちがあるんですけど、でもこういう風に自分の思ってることを話す機会をいただいたり、皆さんと会話したり話すことで何か変わる事があるのかなと思って、本業では喋ることを本業ではないので、なかなか上手くできない部分もあるんですけど、機会をいただけた時はこうやって登壇させていただこうかなと思っています。最近、私自身が思ってる事が、何かの権利の話をしてる時に、福祉と人権がごちゃっとなっていて、話が進まないっていうことがすごくあるなと感じていて、私個人の考えではあるので、それが必ずしも正解ではないと思ってるんですけども、福祉と人権ってすごく密接してますし、人間の幸福を守るためのことだと、切っては話せないものなんですけれども、人権を守るための福祉があって、人の幸福とか社会の支援とか、色んな支援サポートがあるんですけども、とても今世の中が非常に、生き辛さだけでなく、経済的に厳しくなっちゃったり、様々なことで余裕がなく、みんなが何か助けを求めている状況になってきてる中で、加えてすごく自己責任論がどんどん色濃くなっていく中で、福祉が違うんですけども、人に与えられなきゃいけなかったり、支援が誰かだけが得する物みたいな感じになりつつあるなと思っていて、権利を守るために働いていたり訴えたりすることが、だんだんこの人だけが得をする、この人だけが損をするみたいな考えになってしまっていて、すごく危機感を感じています。人権っていうものは、誰もが侵されない権利で、生きていくために、当然皆が持っていていい権利なのに、それがどこか施しとかかわがまとももしくは誰かが得をするというようなことにすごく、途中からかぎかっこ付きの福祉になってしまってる事がすごく多い。これはエンターテイメントでも起こりがちで、何かの誰かの権利とかを主張する時に、一方の人も誰かがでもすごく損をしているとか、でも誰かが生き辛さを訴えてるみたいなことにだんだんテーマがズレてきちゃう事がすごく多いです。今私自身が作品を作る時に、人権と福祉という物に対して、これはこれ、それはそれっていう部分の気持ちと、人権というものは何かということを最近、自分の作品の中でも、直接言えなくても、これは侵されてはいけないうものというものを訴えることにしています。なのでちょっとこの先の色んな作品に触れていただくことがあった時は、「あ、これを言ってたんだな」ってことを思っていただけでも嬉しいです。つらつらと、自分の考えや法や人権の話をしていきたいんですけども、今回憲法をテーマにしたエンターテイメント、ドラマ作りという講演なので、まだ発表になってないものも含めて、具体的なことは言えないんですけども、いい点と悪い点があったなと思っていて、最近のドラマ作りのことを話していきたいと思います。

虎に翼が終って、虎に翼にまつわるインタビューやエッセイの仕事もたくさんある中で、様々な仕事をしてるんですけども、とてもいいなと思っている部分に関しては、様々な当



事者の方の考証の先生を入れやすくなっているなというのが他の現場でもすごく感じています。それは、何となくで書かないっていうのが当たり前じゃんと思われるかもしれないんですけども、スケジュールに追われた作品、ドラマにおいては、本を一冊読みましたとか、何となくこうでしたみたいなことで書かれることが実際すごく多かったなと思っています。ですが、少なくとも私が関わる作品では、多分私もちょっと面倒くさい人と思われている部分もあると思うんですけども、考証の先生を入れやすくなっていて、様々なことがよりリアルだったり、当事者の人が傷つかない環境というものがすごくできてきているなと思います。あとは、私の業界だけですが、男女比が半々とはいかないものの、かなり半々に近づいてきました。時には女性だけの現場があったりして、私が 18 歳ぐらいの頃からこの業界にいるんですけど、その頃は女性だけの現場っていうのはほぼなかったところで、映像制作ではそれはすごく良くなってきているなっていうのをすごく感じています。そういう意味でいうと、作品にこだわって作ることって実はすごい当たり前のことだと思うんですけど、ちょっと一つのジャンルみたいになってきてしまって、時々全くそういうことに一切触れなかったり、まだ感覚だけで作られてる作品っていうのがすごくあるなと感じています。その中で、私がその作品がダメとかそういうことを言いたいわけでは全然ないんですけど、やっぱり配慮とか、考慮が作品によってすごい差あるように感じます。どちらが良いのか悪いのかではないんですけど、一つのジャンルみたいになってきて、「こんな人が作る作品はこう」みたいな、良くも悪くもそういうジャンル分けがされてきてしまって、本当にジャンルで分けるべきことではないんですが、最近それをすごく感じています。私のちょっと苦手な言葉ですけど、過渡期なんだなっていうのがすごく感じています。過渡期って言いながら過渡期っていう言葉がめちゃくちゃ苦手で、全ての事って大体最初は過渡期じゃないですか。それを過渡期っていう言葉で片付けられるのがすごく苦手で、使いたくないんですけど、どうしても使ってしまうことがあるなっていう感じです。そういう意味も自分の中でドラマ作りにおいて、まず考慮されるべきことだなと思っていて、事実と異なることを書く時でも、分かった上で異なることを書くことと、全く分かっていない状態で異なることを書くこと絶対違うと思っていて、なので考証の先生や取材がすごく必要だなと思います。そういう言葉が多分最近すごく多くなってきたので、業界内の話がめちゃくちゃ増えているのがすごく感じていて、脚本とか、テレビ業界とか、出版社とか、主人公の職業が結構広告代理店とか、身内な話が多くなっているなと思っていて、それはそういう多分取材がいらないっていうのが大きいんだろうなっていうのを最近思っています。だから私も、職業が主題にならない場合は、ありだなと思っていて、いつかやるかもしれないんですけど、何かの職業とか人物を扱う時に、感覚で書いちゃいけない、当たり前のことなんですけど、広まってきているのかなっていうのをすごく感じています。私自身が恵まれた環境の中で素晴らしい考証の先生が沢山いて、様々な支援がある中で近年仕事をしているのですが、自主的に調べる癖をつけ続けないと、そうではない現場で良い仕事ができなくなると感じています。でも、その中でやっぱり最近

すごく思っているのが、映像作品が多いじゃないですか。YouTube とか、縦型スマホから始まって、様々なプラットフォームで、作品数があって、それ日本国内だけでもそうです。TV とか、様々な配信とかでもたくさんあって、私が知る限りでも、作家さんすごくチャンスはあるんですけど、準備が間に合わないです。作品によって準備の質の差っていうのをすごく感じています。そうやって来た時に、準備ができないなら、この問題について扱うのをやめようっていうのが結構起きているなっていうのをすごく感じていて、それって、私すごく本末転倒だなと思っていて、叩かれないから扱わないみたいな、炎上したくないから使わないみたいなことがすごく増えてきているなっていうのを思っています。なので、間違ったことを怒るなとか、間違ったものを見るなとか、そういうことではないんですけど、人権侵害になるぐらい叩かれたり、次の仕事が無くなるぐらい叩かれてしまうことを恐れている人がとても多いのを、作家含めエンターテインメントを作る人が感じています。私たちは本数を減らすしかないと思っているのですが、配信ドラマなど様々なものがあるので、それはできないなと思った時に、何が必要なのかなと思った時、基本的な生活の社会、この世の中自体の良さが上がらないと、ずっとエンタメ業界だけじゃなくて、エンタメのパワーの外の話ですが、それを最近感じています。私はあまり好きではないのですが、作品を褒める時に違う作品を下げる人がたくさんいて、自分の作品を愛してくださるのはいいのですが、その作品が下げられた作品の背景を制作者としてはすごく感じてしまいます。恵まれた場所で書いていたからこそ、その恵まれていない部分で花開いたり、個性を出すものだと思いながらも、それができない現場がすごく多いなと思っています。制作側の私と視聴者の私が日々戦っている感じで、視聴者の私からすると配慮がないとか、何でこんなこと、考証入れてんの？みたいな怒りになってしまうのですが、制作者の自分としてはそういうことを最近日々感じています。一人でも私みたいなめんどくさい人がいたらなって思うようなことが最近すごく多いです。私は苦手な言葉である過渡期と言ってしまいましたが、脚本とかドラマ業界は本当に今様々な部分が変わりつつあるなということを感じています。志の高い方とか、いただいている企画も社会の問題や生きづらさを提起しているものがすごく多くて、制作当事者としてはこの4年5年ぐらいで大きく何かが変わるのかなという気持ちも抱いています。同時に、私にとっての虎に翼の穂高先生みたいな人に言われてちょっと凹んだことがあるのですが、「こういう作品ばかりやっていると色が付いて、その色が付いてない作品をやる時に、その色が無いから物足りないと思われたりしちゃうかもしれないから、色が付かないっていうことも大事なことじゃないかな」みたいなことを言われて、本当にはて？という思いになってしまったんです。そういう面も確かにあります。私はエンターテインメントと社会問題を両立すると思ってます。シリアスな味付けじゃなくてもいいと思ってますし、ポップなやり方もあると思います。何をポップにして何をポップにしないかっていう線引きさえちゃんとできればいいと思っています。私はもう全然色付いて大丈夫です、むしろ色んなやりたいことができてハッピーですと返したんですけども、社会問題とかに対して自分の作品の面白い、面白くな

いとは違う視点でお叱りいただくこともすごくあって、もっとやりやすいやり方があるだろうとか、この作品がこうだろうとかすごい言われたりとか、こんな題材をやって得意になってるんじゃないみたいな意見をいただいたりします。でも何か自分の中で誇っていることはあって、じゃあ他に何がいっぱい出てますか？いっぱい出てきてないじゃないですかっていう気持ちがあって、だからそこに自分のなかでは、社会問題とエンターテインメントを両方やるっていう作風はすごく意味があることっていう気がして、しばらくは続けてみようかなと思ってます。別に褒められたいからやってるわけでもないし、人の目を気にしてやってるわけでもないし、認められたいからやってるわけじゃないんですけど、本当にすごく心無い言葉を社会問題にまつわると言われることは確かにあって、最近ではある有名な歌手の歌詞に対して、その意見を超越る人格否定、人を傷つけようと思って言葉を投げつけている人たちを目の当たりにして、それをみてクリエイターの何割とかは「やめておこう」ってなっちゃうんですね。それは間違っていて、人は傷つきたくないし、生きていくときに、そういうことに声を上げたりとかはしんどいと思うので、自分の人生と天秤にかけてできないなと思っていることに関しては否定的ではいけないと思っています。だから自分はやる限りはやると思っているんですけど、賛否の中の賛は自分の支えにはなるんですけど、否っていうものはすごく心に残ってしまうものなので、心を折られてしまうっていうのもある。それはエンターテインメントの作家だけでなく、すごくいると思っています。その中で戻ってくるのが憲法第 14 条なんですけど、第 14 条だけでなく、第 12 条や第 13 条も含めて差別されなかったりするっていうことが、もっと根付かなきゃいけないことだなってすごく思っていて、もちろん会場の中には誰かを排除しようとしたり、差別的なことをする方がいないとすごく信じているんですけど、私としてはその声を上げようとする人たちの壁になったり、逆風になるような存在にはなりたくないなと思っていて、そういう風に自分がずっと声を上げて行けたらなと思っています。ここにいる皆さんも、大きく声を上げなくても、もちろん構わなくて、誰かを否定しなかったり、誰かに寄り添ったりするっていう中立の立場にいる時にも、話を聞いて、その場だけで終わらず、問題の根っこ、深い話ができるところに、なるべくこのディスカッションの場を持っていけるような、皆さんと頑張っていけたらなと思っています。